フレーベルの人間教育の一考察（三）

野崎信洋

一、まえがき

私は、本学研究紀要創刊号に「フレーベルの人間教育の一考察」を述べた。その後学内研究発表の機会に「フレーベルの教育学の多様性について」発表し、この度特にフレーベルの人間の教育における神性観について」の考察をして見ることにした。もとよりフレーベルの深渕な思想を一挙に理解することは到底容易ではないが、神と、自然と、人間との関係についてフレーベルのもっている深い哲学的思想について改めて掘り下げをこころみ、そして、フレーベルの人間教育の一面に触れて見ることにした。

彼が誕生した一七八二年即ち十七、八世紀のころ、独逸国内は、さきの三十年戦争の長い戦いのしこりもあって、独逸は荒廃の時代が続いていた。一方フレーベルの誕生したこの時代は、非常に多くの思想家が輩出したことはあまりにもよく人口に膾炙されている。だからこの時代を「哲学の森」とか、或は、「新人文主義の世紀」といわれ、いわゆる独逸思想文化の黎明期であり、またその全盛時代でもあった。この時代に生を受け、しかも宗教家の家庭に成長したフレーベルは、やがて青年となり多くの先輩思想家の背景に充たされて、その影響を受けないはずはなかった。例えば、カントの独逸浪漫主義哲学、フイヒテの倫理的理想主義としての道徳的自我の完成、ヘーゲルの論理的理想主義における神的理性、或は、無限に多様な個物を創造する過程の同一哲学、シエリングの美的理想主義における自然哲学等からは、フレーベル自身の哲学説を身につけ、或は、教育説では恩師とも称すべきペスタロッチーの直観教育を学び、やがて彼の根本思想となってあらゆる学問研究を深めていったのである。要するに、これら先輩思想家の内容を次第に自身の根本理念として、咀嚼し「一切の事物は神という一貫の原理によって支配されるもので万有はこの中に内在する神を発展せしむること」を先ず目的としたものであった。フレーベルは最初自然科学者になろうとしたが、ペスタロッチーとの触れあいによって、やがて、彼独特の宗教的自我の完成を人間の使命として、実践的な教育者となり、特に幼児教育の先駆者として世界教育史上稀に見る特異な地位を占め、多くの著述を残して、一八五二年七十一歳にしてこの世を去ったのである。

さて、フレーベルの主著「人間の教育」を始め著述の多くは、わが国にても長田新博士を始め他の学者によって研究がなされ、人間教育の一般論については勿論、特に、幼児教育の問題についても深い関心と研究がよせられ、更に、わが国においては終戦後幼児教育の発展にともない、それぞれ現場の保育者によって、フレーベルのもつ深い経験的実践的かつ教育的な学問内容が改めて理解され見直されてきているのである。勿論、フレーベルの幼児教育の扱い方、特に、恩物の思想については今日の心理学の発達した時代に即して、その教育的思考が、今日の教育作業の中に必らずしもこれが内容の実践に時間を要することが指摘されている。とにかく、フレーベルの思想はあまりにも哲学的で、更に浪漫主義の理想的象徴派とも称せられ、他の思想家との一線をも劃している。「一度把握した人間教育のためにのみ、天才的不撓不掘の精神をもって彼の生涯を捧げた」といわれるように信念の強い教育者であった。或は、波乱にとんだ生涯の中に、宗教を通じ、哲学、自然科学、更に、独逸浪漫を一つの土台として思考を続けたフレーベルの生涯の前班は、青少年教育を論じ、いや人間全体の教育原理を論じ来たって、更に、後年幼児教育に意をそそぎ尽したのであった。彼は宗教的自我の自覚を人間の使命としてその実現をその根本理念とした「人間教育」を生み、幼児教育の重要性の意義を強調しつつ思想発展に思索の充実をなしたものと思う。秋山範二氏は「人間を認識の対象として「我」とはなして考察するとき他の存在と異る特徴を見出しえないのであるが、人間とはいいかえれば、自覚的なる存在にして、個々の人間は夫々自己自身を「我」として意識しているものである。――「我」とは自覚の中心ということが出来ましょう」と述べておられるが、フレーベルもこの「自我」を極めることに意義を見い出し自我の完成をめざして、後述する神性発展の内容の具現に精進してゆこうとしたのである。私は、フレーベルの人間教育の内容の一面を捉えながら、この度の本論とも考える幼児観、神性観について考察して見ることにする。

二、幼児教育観の展開

私は、フレーベルの幼児教育における遊びの重要性に触れ、(紀要創刊号)にて、「遊戯の展開」として考えて見たが、今ここに改めてフレーベルの幼児教育観として人間の教育に、その手段として非常に根本的思想内容をふくんでいるということに触れて見たいと思う。フレーベルの幼児教育の根本は一体何であったのか、を問いつつ、それはいろいろと精神面、具体面等多様的に考えられるのであろう。彼は、「幼児教育の根本は何よりも幼児を遊ばせつつ導くこと、即ち、遊戯をもって指導すること、或は、幼児の生命を保有する道は主として遊戯である。」というのである。それならばなぜそのように遊戯が重要なのか、一体遊戯とは何であるのか、をも深く考えて見なければならない。フレーベルは、「遊戯とは幼児が自己の内界を自ら自由に表現したもの、――内界を外界に表現したもの」だからだというのである。幼児、児

童の遊びは、特に、「心情の発展や精神の陶冶や内的感覚を促進する」もので、幼児、児童たちを精神的にも、身体的にも堕落させたくない。——両親や保育者はなによりも先ず幼児期の活動や初期の行動を自らのうちに早くから働いている構成衝動や自己活動を理解し、更に、家庭における幼児期の作業若しくは、自己創造や自己観察や自己実現によって自らを陶冶する育くみを養うことに心がけなくてはならない。」と強調している。フレーベルは幼児教育に対してこのように深い思慮と保育心の昂揚が説かれている。これを怠ると能力と熟練、知識と陶冶とに欠乏したりするといって、幼児の内面にもっている自発活動の萌芽を発展させればよいというのである。赤坊や幼児のあらゆる生命表現は人間の内面的な魂の根源と結び、そこに一つの遊びとなって展開される。従って「幼児、児童の活動的な生命、その生命の諸現象を最も内的な根源において把握すること」が、幼児の教育者として捉えているのである。幼児、児童は自分の生命を何よりも内面的なもの、独立的なものとして知覚するという風に考えるのである。幼児が遊戯する時はただ遊戯である。何等の報酬も結果も求めないのであって、義務も権利も越えた一種の遊戯三昧境とでもいうべき当体ではないだろうか。このよう無心に自己活動をして止まない単純にしてしかも真剣な態度は、人間形成の過程において大いに学習すべきではなかろうか。こうした人間の生活態度や道を求めようとする内面性を宗教家が更に高い眼識として捉えられたと思われる道元禅師の著正法眼蔵弁道話に「この三昧に遊戯するに、端坐参禅を正門とせり」、或は、仏向上事に「諸仏如来、かならず三昧に遊戯するとき、これを仏道という」。また、夢中説夢に「みづから空にかかれるがごとく、物を接取して空に遊戯せしむる夢中説夢あり」とか、「神通」に「諸仏はこの神通のみに遊戯するなり。」とも喝破せられておるのである。要するに、道元禅師は、驀直に遊戯する児童或は遊びたのしむものの自己具現はまさしく至心に求道する人間の真骨頂として説かれ、「三昧に端坐するとき遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる」とものべておられこの真実は、幼児と求道者とを同列視するのではないが、無心に遊戯する段に意義の存することが、いかにも世の教育者保育者に与えられた深い教えのことばとして覚えるのである。

さて、このように遊戯の重要性を考えて見ると、そこに内容の意義ずけを更に考えて見なければならない。フレーベルは、遊戯の展開として、「精神的なものに形態を与え、思惟的なものに構造を与え、見えざるものに、見えるものを与え、そして、彼の神性発展の価値の実現にとり組んだのである。ここに、フレーベルの考案したかの有名な恩物という遊具となって構成され、それ自身の中に自然界の一切の法則が象徴されているという内面的、造型的、知覚的な玩具として考えられたのであろう。要するに、この恩物によって宇宙を知らせ、神を知らせるための教育的遊具であって、更に、神の如く創造する創造力を覚醒させるというところに深い理論と宗教性をもたせたのである。このようにフレーベルは、人間教育における幼児の遊戯時代を通して人間形成の重要な意義のあることを思考したのであろう。「一度毎に、い

まわしい感情が移し植えられると、ここに一切の害悪の中で最初のかつまた最も憎むべきわがままが作り出される」となし、「乳呑児は、呑みこむことの意義、幼少時に呑みこんだもの、これは、唯一の活動であって、若し、この時期に一生取り返すことができないようなことがあったならば大事なことである。」といっている。人間としての出発点に立った人間を教育する時節の大切なことを説いているので、幼児はいろいろな多様な外形的、言語的なことなど急速な進展を伴って吸収しようとするところに、初期の人間教育の深い意義があるというのであろう。人間一度生命を受けるならばかけ甲斐のないそれぞれの人生に向って進むのであるが、人間としての最初の時代に形成される慣習、性格、頭脳、言語等を始め、諸機能の発達段階における適当な教育的要素を施してゆかねばならないことは論を俟たないことである。エミール第一編の冒頭に、「万物をつくるものの手をはなれるとき、すべてが悪くなる。」とは人間初期の教育に対してある重要な内容を示唆しているものと考えられるのである。また、「世の親たちが、女性は自然によって、乳房を与えられている。だから自分の子を自分でやしない育てなければならない。」と、いずれも初期における自ら育てることの意義を真剣に考え、教師も、親もそして一般世の人に対しても何か現代の世相の一面に深い反省を問われているようにも考えられるのである。フレーベルも言っているように、「こどもの誕生の刹那からその本質にしたがって理解され、等しく取り扱われなくてはならない。人間行動のこの最初において、病的な児、卑屈な児、凡俗な児、愛昧な児、悪質な児等の何物ものみこまない」ということが極めて重要なことであろう。それは、現在も将来も人間生活にとってまことに重要なことである。即ち、幼少時の頃の発達段階に幼少時のみならず、その時代時代に与えられるべきものを与えることによって豊かな人間の成長を逐げさせることができるもとであると思う。フレーベルは、度々述べているように、幼児を神の化身となし幼児の本性の中に、無限なもの、永遠なものを見ようとした。それほどまでに幼児を純粋なもの、或は神的存在なものと幼児を捉えている。「社会は人を堕落させる」とはルソーの根本的表現であるが、フレーベルは、一途に神性の発展に意をそそぎ思考を深めたものである。そこで、私は、常に教育するものの心を正すべきであって、長田新博士(フレーベルに還れ)は道元禅師の著、学道用心集に「発心正しからざれば、万行空しく施す」。と、この語をあげられ、幼児教育に対して深い意味のあることを説明されている。そして、フレーベルのような浪漫主義の哲人ならではできないような仕方で、天地をきり開いたものではあるまいか、とも述べられ、「広くもあれば多望でもある教育の野は、幼児教育ではあるまいか」と、博士は結んでおるので、いかに幼児教育の困難さと同時にその教育活動の極めて大切なことが述べられている。

三、神性論の展開

フレーベルの深い思想的展開の中に、特に、彼が常に反復し述べている其の著「人間教育」に児童神性論がある。その思想展開に、「万

物は永劫の理法が秘められている。従って幼児、児童のうちにも永劫の理法が宿っていて、その永劫の理法が神性である。だから幼児、児童の本性は神性である」。というのである。要するに万物は神性で凡て神から生じて神は凡ての万物を支配している。そして、宇宙を一つの大きな有機体と見なして、「鉱物、植物、動物、人間、天体等すべてに一貫した統一体」として見てゆくのである。これがフレーベルの教育学の一つの根底をなしている。

さて、そこでフレーベルの世界観は宗教を基盤とした独逸浪漫主義といわれ、彼固有の宗教的教育学を打ち立てようとしていくのである。そして、「人間は地上への出現において三重的な関係がもたれるので、即ち、自然の子、人間の子、そして神の子として観察し顧慮し育くまなければならない」、と考るのである。しかし、幼児、児童をたゞ神的な実在としてのみ見ないのであって、それは、「創造的本質としての神性であり、即ち絶えず創造してやまない実在であり、生命に充ちた生命を生み出すところの実在としての神性」を意味していると考えている。もう一つの捉え方は、幼児、児童はあくまでも「自然的な契機、人間的な契機と神的な契機との融合体で」常に、幼児、児童を自然、人類、神との関係において考えていくので、ここにフレーベルの教育学の特色があるとも考えられている。万物には共通な神性が内在しているので、悉有神性論的なことば表現が可能とも考えられる。しかもこの神性が万物の本性を形成しているのであって、そして、自発活動の実践的な努力がなされなければ、その神性をも発揮されないのである。生れなが神性を具有しているけれども自己啓発によってでなければ発展がないので、そこで自発活動をもって神の心を知らせようとする教育的作業が神性発展の手段となり、このことが内容となって思考され、更にその具現化が考えられてゆくのである。そこで、このようにフレーベルの神性発展の思想的な見方を考えて見ると、仏教の仏性論の一面を想起するので、ここにしばらく仏教家の哲学観を引用して見ることにする。無論、基督教的な世界観、宗教観及び人間観等は、その思想発展との捉え方にはそれぞれ異なる面も多くあるだろう。然し、どこかに人間覚醒的な高い理想を自己の全人格活動によって具現せんとする人間の勇猛精進を求める点においては相共に通ずる一面が考えられ、フレーベルの神性の起し方、そして、人間の心田を耕作する人間教育の考え方について見てゆきたい。秋山範二氏の「道元の研究」「人間」に、「仏性の語は神性という言葉を思い起させる。この点よりは又世界を一者、神、絶対精神等の自己開展となすプロチノス、スピノーザ、ヘーゲル等の世界観を連想させる。勿論これらの世界観に於て根源的なるものとせらるる一者、神等が何れも皆何等か有的なるに対して道元に於ける仏陀が絶対無なる点において、又その自己開示の仕方が前者に於ては有機的連続的なるに対して道元に於ては刹那生滅非連続的なる点に於て互に、相異する所あるのはいうまでもないが、しかし、存在の根據に同時に価値の根據としての意義を見出す点に於ては両者相通ずる……」と述べておられる。勿論、秋山氏は直接的にはフレーベルの神性論として引用されてはいないが、彼が独逸哲学に

存在する神性論の流れを汲んでいることはこれ又言を俟たない。更に、「一切の存在が仏性の自現なることは存在の根拠として」、「自覚的なる存在の根拠としての仏性」「山川草木悉皆成仏」、と証し、悉有仏性の意義の存在することを述べ、「人間という存在の本質が仏陀そのものである。」と秋山氏は言っておられる。なお又道元禅師の「この法は人人分上ゆたかにそなわれりといへども、いまだ修ぜざるにはあらわれず、証ぜざるにはうることなし。」と示されるこの発心修行の自己の態度に覚醒を与えられたものではあるまいか。即ち自己の全人格によって具現せんとする人間の努力に深い意義のあることを示されたものと考えられる。そこで、フレーベルの神性具現の哲学も自己自らの活動力によって自己を発見しようとするその心的態度を「人間教育に述べておるので、たといこれが幼児、児童という存在なるが故に軽視しなかったところに教育の意義が存するという考えである。大森禅戒氏は、「仏教の教育的原理」に、児童の無限に伸び行くべき力、これをフレーベルは神性と名づけ、本来清浄、純一無雑の自己を仏教では仏性と名づけた。」とのべ、仏性と神性とはその宗教的立場、或は根本的概念において己に相異するだろう。然し、私は、前述したように、フレーベルの神性観を考えるについて仏性観との思想展開の一面に相通ずる宗教観の一端を捉えて見たが、この両面のことについては一挙に論断は出来ないので後日研究を進め改めて理解を深くしたいと思う。

さて、フレーベルは、一貫した神性論の立場に立った人間観であって、「人間性の自覚、自分自身を完全に自覚しようとするならば」、と、自己覚醒の哲学を根本的命題としながら、「人間は自己を神性としてよりほかには自覚することができない」、と、或は、「自己は神性的自我のあらわれである」、として、「神性を自覚することなしには、自己の自我を自覚することができず、従って、自分自身を完全に自覚することができないであろう」と、自我確立の内面を真直ぐに掘り下げている。これがやはり彼の人間教育の思想的特徴であると思う。「我とは自覚の中心ということができる」とは、前述の秋山氏の言である。このようにフレーベルは、神性を土台として自己内省、自己改革、自己形成を神性発展の中に見えだそうとした。即ち、そこに内面的な自己を具現しようとした。神性は単にわれわれの中に静止しているものでもなく、内在しつつ超越しており、超越しつつ内在している。生成発展、創造しつつ具体性をおびた神性で」、あり、「神から生ずれば、そのすべては神のはたらきをもって、この宇宙をすべるということ」になる。「この神こそすべての規定する唯一のものとしてはたらき、神はすべてのものの唯一の本源である。これが万物を支配する」、と見ていくのである。さて、ここに、人の教育の基盤となる神性活動を捉えながら発展させようとした。神によって生命を与えられ、その本質を保持するものと考え、或は、その神が人間の本性の中に働いておるというのである。この本質的な働きを最も純粋な姿として所有しておるのは幼児である。幼児こそ神の本源たる神性の萌芽である。表徴である。と考えたのであろう。勿論、その根本には基督教的中心思想があって、これを人間教育に求めていったのである。フレーベルは、「人間

性のうちに神性を自覚していくこと、これがわたくしの使命であり、わたくしの天職である。人間性としてのわたくしの生命でもある。そして、このように、人間性を神性として、自覚するようになることが、わたくしの新しい生命段階であり、生命の革新であり、新しい人生の春である。」とこのように信仰的感覚の神性具現に終始したのであって、彼自身幼児、児童とともに遊戯し、自然をともとし、自然の中に神を直観しようとした。自然は人間を教育し、自然は生産的精神力を与えてくれる存在である、自然こそ幼児、児童の本性を啓き発してくれる学校であって何物でもない。神性は無限であり、絶対であると、自然と人間とそして神との三位一体観を常に人間の教育に結びつけてゆこうとした。

人間の教育は先ず幼児、児童からという根本概念に立脚している。更にそれ以前に、母の胎内に宿っているときから、永劫不滅の本質、神の魂、神の精神に従って人間の形をとって現われでた神的なものとして、即ち神の愛の保証として、神の目じるしとして育くまれ、そして認められなければならないのである。神の変形的な存在として人間を創造した。というのである。フレーベルの恩師ペスタロッチーは、「神は人類に最も近き関係である」とか、「人間はもともと神族、神の子」などと述べ、神人同根説をなして、特に、宗教教育における宗教的意識の内在性を強調しており、従って、フレーベルの宗教教育も更にこれを進めて、神と人との関係を深く認識して、「この神性が生成発展してゆく具体的な神性を誕生したその時から、早くもその具現的なものを嬰児において見てゆく」というところが彼の教育学の独自性があるともいわれるゆえんである。嬰児や幼児の天真爛漫のいかにも新鮮に充ちた美しい花のような状態は、やがて、「完成される人間となることは、こどもの最初の出現と、最初のまなざしとの中に決定的によこたわっている」と述べている。

さて、前述したように、フレーベルは、いく度か人間性と神性との関係を明らかにして、この神性の自覚こそ人間教育の目標であって、そこで、神性の自覚とその発展とを人間自身に表現させるために、その内在性をどのように導くかの研究努力が彼の教育の手段でもあった。結り、神性の具現化を思考し、前段に触れた「恩物」を与え神の恵みを知らしめ更に内面思考を深からしめようとした。今日、これが、あまりに哲学的思考であり、幾何学思考性をふくんでおるために敬遠される面もでたのである。然し、神性発展のために、「発展は生命であり、静止は死滅である」といって、本来的な人間になし、神的なものを精神的なものに、有限的なものにおいて、無限なものを見る。目に見えるものにおいて、見えざるものを見、感覚的なものにおいて、超感覚的なものを見よう」、とする。この宗教性の哲学において、いかにフレーベルの浪漫主義の象徴的特徴が表現されているかが認識される。

これを要するに、フレーベルの「人間教育」が神性発展を根本とした象徴主義の宗教的理想家であったかということが理解されるのである。彼が生れながらにして宗教的環境の家庭に育ちながら、且つ、時代背景となった独逸哲学の思想的の影響を受けつつ自我確立の内面性

を高めつつあったことは至極最もなことであろう。彼は又あらゆることを体験した実行主義の活動自体自己の生命活動であり、他は是れ我に非ずとした彼の偉大な思想形成となって発展したのであろう。フィヒテもヘーゲルもそしてシェリングも彼の精神形成の過程には多くの思想導入となったことは否定できない。

このように彼の世界観、人間観を樹立した思想内容には神の存在を肯定的に凡てを捉え、「神は万有に内在して、万有を超越している」、という展開論旨は、即ち、万有在神論者のクラウゼの「神によって生存する。唯一の神を外にして何ものも神ではない。ただ神自らが永遠に創造したもの、それは、神そのものの中に自らの像として、不滅に造られたものである。神の中に神によってあるものである。」と述べている。こうした神を中心にした至上哲学を唯一として思想発展の充実を思考したのであろう。彼は「完全なる人間とは完全なる生命をもつ人間である。」即ち「一人の人間としては完全なる全体である。全体の人類からすると、自己とはほんのその一部分に過ぎないもの、部分的即全体、全体的部分即部分的全体、ここに生命的生命が宿っている」としている。この部分と全体との調和的宇宙観の中に人間自身を考え、教育の問題を思考し、神的な内面を統一しつつ、内奥にある万有の生命を外部に顕現せしめるような自己活動が自己の生命であると見てゆくのである。

以上のように、フレーベルは幼児の全人格を認め、全人間性、乃至生命そのものを理解しながら、人間の生命活動についてもまた精神的な内的生命についても深く直観し、知覚的にもこれを認識して、そして、注意深い保育はやがて、そこから児童の外的表現の中に一定の結果が現われて来ない中に早くから人間の教育を始めなければならないとしている。

四、むすび

フレーベルの教育思想の基礎理念となった宗教的な学問を別にすれば、数学、自然科学、物理学、化学、鉱物学、財政学、或は建築学等を始め哲学に関する極めて多様的な思想の学問研究をしかも情熱的に努力を重ねたことが、やがて、フレーベルの教育学をして確立せしめたものであった。或るとき彼がイエナ大学に在学中学資に困り、経済的な理由から大学を中退した。そして、両親の家に帰り、シルレルやゲーテを始め多くの哲学書を繙き、更に、美術書等にも専心に研鑽した。遂に、「人間の教育」とは何ぞや、それは、「人間の生命の教育」、ということでなくてはならぬ。と学問的意識の昂揚に励み、その本質的なもの、即ち、フレーベルの中心思想としての神性哲学を思考し、教育学の実践者としていよいよ思想の内容を深めたのである。「神聖即ち人間の本質は教育によって人間の中に実現され、発展と自覚の域に進めなくてはならない。」という教育活動の神性の顕現に意を尽したのであった。人間生れながらにして知的探求的存在であるとして、精神的の価値を求めてやまなかった。アリストテレスも「人は生れながらにして知ることを欲する」といい、また、シュプランガーは、「児童

の精神形成について第一は知的な影響、第二は美的な影響、第三には技術的経済的な影響、第四には社会的影響、そして、更に、宗教的な影響」によって行われるというこれらの多様性をフレーベルは人間形成の教育作業の形の中に、精神的な中に結びつけようとしたといわれている。私は以上フレーベルの人間教育の一考察として神性観の一端と、幼児観の展開の一端を考えてきた。更に、私は将来フレーベルの思想展開の中に、言語学を通しての人間教育、或は、基本形とは何ぞやと形の研究においての面、線、点の宇宙観的調和態の追求、これら多くの諸形態を中心にした理解を深めて見たい。

参考文献

1、正法眼蔵　道元禅師
2、道元の研究　秋山範二
3、フレーベルに還れ　長田新
4、フレーベルの教育学　庄司雅子
5、フレーベル　庄司雅子
6、エミール
7、人の教育　玉川大学
8、ペスタロッチーの教育思想　長田新
9、人間教育　ペスタロッチー
10、人間の教育（フレーベル）　世界教育学選集(上・下)
11、人間教育　岩波文庫(上・下)